

とっとり県民活動活性化センター情報誌

てとり

災害

～わたしにできること、あなたにできること～

をとらえなおす



vol. **20**
2024.3

vol.
20
2024.3

てとり

CONTENTS

特集

4 災害をとらえなおす

～わたしにできること、あなたにできること～



倉吉市

社会福祉法人
倉吉市社会福祉協議会



鳥取市

るりゅーる



米子市

NPO法人
西部ろうあ仲間サロン会



休眠預金事業災害支援

8 認定NPO法人 人と動物の 共生センター 鳥取支部



9 とっとり 震災支援連絡協議会

高校生ing

10 食を通じた 地元の魅力発信

学校法人松柏学院
倉吉北高等学校 調理クラブ



災害をとらえなおす

令和5年8月15日、お盆の最中に台風7号の影響により線状降水帯が発生し、鳥取市佐治町では観測史上1位の降水量を記録し、甚大な被害を及ぼしました。当時の様子を、鳥取市佐治人権福祉センター所長の栗谷真由美さんに聞きました。



鳥取市佐治人権福祉センター
栗谷 真由美 所長

当日は有休で自宅にいました。朝起きた時はまだ避難をしないといけないとは思っていませんでした。ただ、2月の大雪で我が家前の崖が崩れ、土嚢を積んだままの状態でしたので、不安ではありましたが、10時前になって佐治人權福祉センター（以下「センター」）に出勤することになりセンターへ向かいました。雨は小康状態だったのですが、到着すると目の前の川の水量がかなり増えて、橋の高さがギリギリになっていました。

昼過ぎになって、佐治町外で暮らす家族のところに避難をすることにしました。その後、他の家族とも合流して千代川から離れた別の親族のところに避難して一夜を過ごしました。幸い支所、友人との連絡は取れていました。

翌日佐治に帰ろうとしたのですが、道路に土砂が流入していて通れないといった情報が入っていたので、どうしようか迷っていました。友人が、地域の情報などをLINEで送ってきてくれて、なんとか危険箇所を避けながら佐治に帰ることができました。

センターへ到着してから、近隣の方から昨夜の様子などを色々伺いました。そして、私も普段から気になっている独居の方に連絡をしたり、支所や関係機関からの情報を収集して必要な人に提供できるように準備をしていました。停電の影響もあって、どこに給水車が来ているといった支援の情報が住民の方に届いていないというような



電の影響もあって、どこに給水車が来ているといった支援の情報が住民の方に届いていないというような

こともありました。

また、センターへ来訪される方も何人かいらっしやいました。年齢はバラバラなのですが、地域で一人暮らしをしている方が中心で、どの方も昨日の状況など堰を切ったように話されました。きっとお一人で不安だったのだと思います。

数日してから「希来里食堂」という地域食堂を運営しているメンバーの皆さんと話し合っ、お弁当を作って独居の高齢者の方を中心に配布をしようということになりました。車が通れないところは手渡しのリレー形式で運び、そこから各世帯へは民生委員の方に協力してもらってお届けしました。



台風7号で不安な日々を過ごされた独居の方へ、希来里食堂スタッフや民生児童委員さん、各集落の皆さんのお力を借り、お弁当を配りました。



私も何軒か配布する際に同行しました。印象的だったのは普段あまり地域食堂などに参加されない高齢者の方から「私のこ

とも思い出してくださったんだか」と言われたことです。別のお宅では、「私のことを心配してくれてありがとう」とおっしゃる方もいれば、「申し訳ないので、あまりお世話になりたくない」とおっしゃる方もいらっしやいました。こうしたお声を聞くことで改めて普段からの繋がりが足りていないと感じました。

また、今回地域の方々普段からの繋がりを活かして見守りなどを行ったという話もお聞きました。例えば月に1回、男性の方々が集まってお酒を飲む集まりをしている集落があります。その際、炊き込みご飯を多めに作って、独居の高齢者宅に持っていくという活動を普段からされているそうです。今回の台風の際もメンバーの皆さんで見回りなどをされたと聞きました。他にも、道路が流されてしまい、そのまま夜になり暗く見づらい状況だったところ、近隣の住民有志が、車などが落ちないようにパトカーが来るまで交通整理をされていたそうです。

災害時にはこうした地域のことを気にしてくれる方がいることや、また地域の繋がりが大事であり、日頃からこうした繋がりを生み出せるように、センターとしても皆さんに働きかけをしていくことがやはり大事だなと改めて感じました。



「みんなが集まって何かしよう～」と始まった「ソーイング教室」です。おしゃべり半分、作成半分ですが、いろいろな相談や情報交換の場になっています。顔が見える、声が聞こえる、そんな事業をいろいろ工夫しながら、地域の方の居場所になればと思います。

【特集】

災害をとらえなおす

「わたしにできること、あなたにできること」



倉吉市

社会福祉法人
倉吉市社会福祉
協議会



鳥取市

るりゅーる



米子市

NPO法人
西部ろうあ仲間
サロン会



倉吉市

一人一人ができること。
みんなでつながること。

社会福祉法人
倉吉市社会福祉協議会

2016年10月21日に起きた最大震度6弱を観測した鳥取県中部地震。倉吉市を中心に1万5千棟以上の住宅の屋根瓦や壁が崩壊する被害に遭い、多くのボランティアや市民らが協力して復旧作業にあたった。災害時にどのようなことが起き、日頃から何を心がけることが大切か。当時、倉吉市災害ボランティアセンターでボランティアコーディネーターを務めた倉吉市社会福祉協議会の林原香里さん（地域福祉課長）と中本直帆さん（同主任）にお話を伺いました。

災害ボランティアセンターを設置し、半年間にわたって運営されました。まず地震発生時はどのような様子でしたか。

林原さん 中本さんと向かい合って座っていて、揺れがおさまった後、急いで外に逃げました。倉吉市社会福祉協議会（以下「社協」）の建物も新しくできて2年でしたが、2階の天井が大きく損傷したため、上灘地区の公民館を借りて地震が起きた翌日に災害ボランティアセンター（以下「センター」）を設置しました。

実際にどのような活動をされましたか。

中本さん ボランティアさんをまとめ、住民の方々につながることが私たちの仕事でした。「屋根にブルーシートをかけてほしい」「瓦礫の撤去を

お願いしたい」という声が多く、当初は電話が鳴りっぱなしでした。ブルーシート張りは屋根に登り危険を伴うので、大工や塗装業者の方々、同じ年の春に起きた熊本地震で活動した経験者、県内外のボランティアさんと一緒に活動しました。





活動をする中で、何か気づかれたことはありますか。

中本さん 色々な情報が届かず、助けてという声を上げられない人がいるかもしれないと感じたので、社会福祉士や介護福祉士、精神保健福祉士ら専門職に協力してもらい訪問活動をしていきました。

実際に、家の前に瓦礫が積まれたままの家を見つけたことがあって、話を聞けばひとり暮らしのおじいさんが「防災無線も耳が遠くて聞こえないし、どうしていいかわからない」と言われたこともありました。

林原さん 地震の被害は外見ではわからないことも多く、訪問して初めてわかることもありました。

その時に知ったのが、「助けて」といにくい人もいるということ。初めて会う人に、地震で散らかった家の中を見てもらおうのが「品が悪い」と言われ遠慮されることも

ありました。近所づきあいが減ってきた時代性もありますが、普段から顔が見える関係づくりやつながりづくりがいざという時にも必要だと感じました。

中部地震を経験し、その後どのような活動につながっていますか。

中本さん 子どもから大人まで、福祉教育に力を入れています。例えば、学校に障がいのある人と一緒に出向いて交流活動をしたり、中学生が地域の人と清掃活動などを通して地域貢献を考えたりする機会を作っています。

また地域においても、どこに誰がどのように暮らしているか、普段の困りごととは何なのか、災害時にはどう動くかを話し合って作る「支え愛マップ」づくりを進めてきました。いずれも、まず地域のことをみんなが知ることや支え合って生きていくことの大切さを学ぶことが目的です。

中部地震から8年。今、感じていることは何ですか。

林原さん 8年も経つと直後にはあった危機感がだんだん薄れてくるし、中部地震を知らない子たちもいます。いかに次世代に伝えていくかは課題ですね。

2年前から中高生やその保護者を対象とした減災講座を開いていて、進学や就職で住む環境が変わっても、自分やまわりの人と協力して命や暮らしを守っていけるようにと思っています。いかに他人事でなく、自分事として考えられるか。今の時代、情報もたくさんあって、人とのつながりが薄くなっていると言われていますが、みんなで助け合って生きているんだよという意識が持てるようにしたいですね。

それは当時の活動で強く感じられたことですか。

中本さん そうですね。センターで活動する中で、私たち自身が気づかされたことですね。

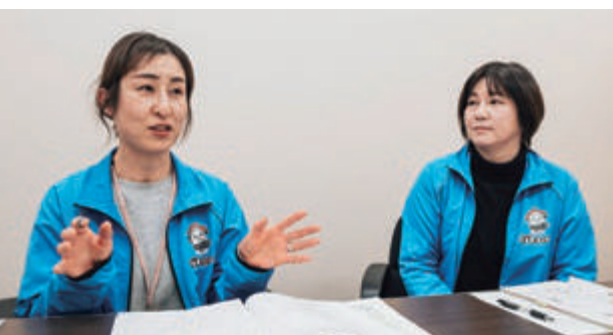
災害ボランティアセンターとなると私たちも特別なイメージがあって、特別なことをしないとけない



と緊張して頑張りがちになるけれど、落ち着いて振り返ると、平時と何も変わらないんです。一人一人ができることで協力していただけると嬉しいんです。

例えば、センターの運営においても、力仕事だけじゃなくて、子どもが参加してくれて炊き出しの手伝いをしてくれたり、コーヒー屋さんに来てくれてセンター内であったかいコーヒーを振る舞ってくれたり、マッサージをしてくれる人がいたり。私たちには気づけないような心遣いをボランティアさんがしてくださり、いい雰囲気と一緒にチームとして、

でも災害時じゃなくても助け合える人や地域って、もともと素敵ですね。そんな助け合いの気持ちや地域をみんなでこれからも目指していきたいと思っています。



中本直帆さん(左)、林原香里さん(右)。

社会福祉法人 倉吉市社会福祉協議会

所在地／倉吉市福吉町1400番地 倉吉福祉センター内
連絡先／電話：0858-22-5248 (代表)
メール：info@kurayoshishakyo.com
Webサイト／https://kurayoshishakyo.com/

Webサイト



facebook



みんなでやる大切さは、普段にもつながりますね。

それぞれができることをやっていたんです。

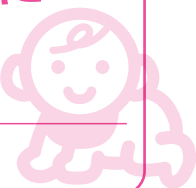
林原さん そうですね。いざという時に助け合える人や地域は素晴らしいと思います。

でも災害時じゃなくても助け合える人や地域って、もともと素敵ですね。そんな助け合いの気持ちや地域をみんなでこれからも目指していきたいと思っています。

活動内容

鳥取市

子どもを抱えて 避難するために 必要な準備を



るりゅーる

初めて子育てをした時が想像以上に大変だったんですが、ベビビクス*に参加し、同じ境遇のお母さん同士でつながれ、気持ちを共有できて安心した経験から、お母さんがほっとできる場所を作りたいと思ってるりゅーるを立ち上げました。ベビビクスへの参加は赤ちゃんの発育促進、お母さんにとっては赤ちゃんとのふれあい方や遊びを知る機会になるとともに、悩みを打ち明けたり、情報交換をしたりする場にもなります。

赤ちゃん期が終わっても交流が続けられるように、音楽の持つ力を活かしてその人らしさを引き出す「ミュージック・ケア」も取り入れました。産後の体力回復を目指すママビクスもやっています。

ベビビクス、ママビクス、ミュージック・ケアを柱に、現在は、鳥取市内を中心に県東部の支援センター



※ベビビクス
赤ちゃんとお母さんのスキンシップを基本に、ベビーマッサージとベビエクササイズからなるプログラム（一般社団法人日本マタニティフィットネス協会ウェブサイトより）



三村恵里さん(左)、浅見真子さん(中央)、櫻村ふみ代さん(右)。

災害時の困りごと

平成30年の西日本豪雨で、自分自身も避難に迷った経験から、判断の難しさを感じていました。その後も毎年のように大雨や台風があることから、子育て中の皆さんの防災のことが気になり、教室に参加してくれたお母さんやお父さんに防災に関してアンケートで状況を伺ってみました。そこで出てきた声の中には、「避難所で子どもの夜泣きが心配」「大量の荷物と子どもを抱えて避難できるか心配」「子どもの荷物をどこまで用意すればいいかわからない」などがありました。水やおむつ、おしりふき、ミルクなど何日分も避難所にはありません。子連れだと、離乳食や液体ミルクなど、子どもの食べられるものも揃えていかないといけません。

あと、アンケートではお母さんは子どもを連れた避難時のことを考えるけど、お父さんは何かあった時に困らないように準備物を揃える回答が多く、男女で考えの違いがあることも知りました。お互いの認識を知ることが必要ですね。



これからの対策

情報のシェアを進めたいと思っています。昨年11月にファミリー防災セミナーを初めて開催し、それに合わせて防災ママバックとポーチを作ってみました。何がどれくらいあれば最低限安心できるのか、自分たちで把握することから始めたいです。季節によって必要になる物が違うので、半年に一度は防災セミナーを開催したいと考えています。いつものママバックを防災につなげる意識付けや、備えへのきっかけ作りになるよう、取り組んでいきたいです。

また、避難をする際は子ども

がいると家族だけでは対応が難しい場合もあり、普段から近所の方とお互いに家族構成を知っ



ておくなどつながりを持ち助け合えるよう、私たちの活動を軸に、交流する機会を増やしていきたいと思っています。

るりゅーる



公式LINE

Instagram

所在地／鳥取市吉成南町一丁目28-7

連絡先／電話：090-1685-8736

メール：relieur.tottori@gmail.com

公式ブログ／<https://profile.ameba.jp/ameba/relieur-tottori>





活動内容

高齢者の聴覚障がい者同士が情報交換し、交流ができるコミュニケーションを作りたいたいと思って始めました。メンバーは若い人は20歳から最高齢は91歳まで、今は80代の人が多いです。月3回集まって健康体操をしたり、みんなのできるボッチャなどのスポーツをしたり、記憶力ゲームをしたりしています。そのほか、小中学校や高校に出向いての手話交流会、月に1回は地域の人も交えてまちの保健室も開いています。

コロナで中断していたカフェを春から再開し、新しく食堂を週1回オープンする予定です。



これからの対策

情報共有の方法を考えていきたいです。たくさんさんの情報を全部文字だと読めなくなるので、手話を動画で見ることができればより便利に情報を得ることが出来ます。

ただ、言葉と同じように、手話には方言があって、地域によって少しずつ身振り手振りが違い、時代によっても少しずつ変化していきます。そのため、テレビなどで全国の標準手話を見た時は一度地元の手話に頭の中で変換しなければいけないので、その分だけ時間が必要になります。

できるだけ早く、リアルな情報として分かりやすく届けられるように、団体の公式LINEをこの秋くらいに作りたいと思っています。スマートフォンを使うこともみんなんで挑戦していきたいですね。

最近、公民館から一般の人と一緒に防災訓練をしようという声をかけていただきました。普段から聴覚障がい者にとって不便なことやコミュニケーションの取り方について、共有しておくことも大切なので、そういう機会を増やしていきたいです。



米子市

聴こえないことで 情報共有や避難に 困らないように

NPO法人西部ろうあ仲間サロン会



小林典子さん(左)、森田次江さん(右)。

災害時の困りごと

聴覚障がい者にとっては、一般の人と同じように情報を得ることが難しい場合があります。例えば、災害時になるとテレビの端にはテロップが常に流れていますが、私たちは字幕放送を見るので、そのテロップと重なって見づらくなることがあります。

あとは周囲とコミュニケーションが取れるかどうか心配ですね。避難所に行ったとしてもそこでお互いに分かり合えないし、いざという時に逃げる場合は「何かありましたか?」と聞くことも難しいし、筆談をする時間もないかもしれません。その時はとにかく周りの人が引っ張ってくれるだけでもいいし、そういうことを知っておいてもらわないといけないなと感じています。



NPO法人
西部ろうあ仲間サロン会

所在地／米子市旗ヶ崎6-15-26
連絡先／電話：0859-57-8342
メール：seibu.salon@gmail.com
Webサイト／https://www.nakama-saron.com/

Webサイト facebook



災害支援



ペット 避難



休眠預金等に係る資金の活用に関する法律（休眠預金より10年以上、その後取引のない預金等（休眠預金等）する制度が2019年度から開始しました。

今や日本の4世帯に1世帯がペットを飼っています。一昔前と比べても、例えば犬を室内で飼う人が増えたようにペットは家族同然の存在になってきています。そんな現代社会で、人と動物が共に生活することで起こる社会課題の解決を目指して活動しているのが「認定NPO法人人と動物の共生センター」（本部・岐阜県。全国初となる鳥取支部が、2023年1月に設立されました。

「本部が行っている5つある活動のうち、鳥取支部では生活困窮者のペット飼育問題の支援と、ペット防災・災害時の人とペットの避難の最適化に向けた活動を行っています。動物だけでなく、飼っている人も、周囲の人も、3者の福祉を守っていききたいです」

そう話すのは、半年間岐阜県で研修を受け、鳥取支部で活動を行う支部長の松本温子さん。鳥取を拠点に中国5県でペット防災啓発活動を進めていく目的で休眠預金事業に申請・採択され、啓発に使うチラシ制作とペット防災カレンダーの配布を行っています。

災害時に起こる課題の一つが、ペットと一緒に入れる避難所の少なさです。「ペットが室内に入らず、駐車場のような場所にケージを置くことが多いです。飼っていない人の中には動物嫌いの人やアレルギーを持つ人もいて、一緒に避難することは課題ですね。そうすると、ペットは家族も同然だと思う人は、車の中で寝泊まりしたり、倒壊

飼う人も、周囲の人も、安心して避難できるように

認定NPO法人 人と動物の共生センター 鳥取支部

八頭郡智頭町福原19 TEL. 080-4005-7988

や浸水等の危険があっても在宅避難を選ぶ人もいたりします」

チラシを通じて、①ペットのみ預かれるペットホテルや動物病院②ペットの同伴避難の受け入れ態勢を整えている指定避難所③ペットと一緒に寝泊まりできる宿泊施設④車中避難が可能な商業施設の駐車場など、動物避難所としての登録を呼びかけ、また、ペット防災啓発に関わる資料配布や情報提供をする窓口として、店舗や施設に声をかけています。

「日頃からこういうところに避難できる場所があることを知ってもらいたいし、横の連携を作っていくことで、ここは何頭くらい預かれるかとか、情報を共有していきたいです。あと、平時からの備えということでは、飼い主さんの準備も大切です」

ペット防災カレンダーには、ペット同伴で避難をする際に必要な備蓄品のチェックリスト、避難所に入るためにしておくキャリアのトレーニング※などが記載されています。

「日常のことがいざという時に役に立つので、できることはやっておくこと。いろんな人が入る避難所では、飼い主さん側の意識も大切。避難の選択肢も、ペットを飼う人への理解も広げながら、飼い主さんに対するアプローチもしていきたいですね」

※キャリアのトレーニング
ペットを入れ移動できるキャリア（クレートともいう）に、ペット自ら入り、中で落ち着いて待つことができるようにするトレーニング





災害支援

休眠預金事業

休眠預金事業とは…「民間公益活動を促進するための金等活用法」に基づき、2009年1月1日以降の取引を、社会課題の解決や民間公益活動促進のために活用

東日本大震災発災時に、現在代表を務める川西清美さんが立ち上げた「とっとり東北県人会」が、県内に避難してきた人たちの支援を始めました。1年たった2012年に、「とっとり東北県人会」をはじめ4つの団体が手を組み、「とっとり震災支援連絡協議会」を設立し、鳥取県内全域に活動を広げ、県から東日本大震災避難者支援の事業を受託してきました。一時最大200人を超える避難者を支援し、現在は64人が避難者登録しています。

「発災当初は物質的な支援がメインだったところから、段々と人間関係や精神面などの相談が増えました。いつまで鳥取にいいのか、地元はどうするのか。仕事も非正規雇用で経済的にも苦しかったり、家族内でも分断が起きたりするようなケースもありました」

そう話すのは、立ち上げ時から支援コーディネーターを務める佐藤淳子事務局長。被災して不安定な中、慣れない土地で暮らしていくことは簡単ではなく、その全般をサポートしてきた経験から、災害時に必要なことが見えたといいます。それは、つながりの強化です。

「災害時には支援が必要な人の把握が重要であり、それには普段から民間を中心に色々な団体が連携しておかないといけません。企業でも支援をしたいという企業もあり、そういうニーズともきちんとつながることが大切です」
10年以上にわたる活動を活かし、

災害支援も日常の困りごと、つながることから

とっとり震災支援連絡協議会

鳥取市若桜町31 カナイビル1F TEL. 0857-22-7877

さらに包括的なネットワークを作ろうと休眠預金助成事業に申請し、採択されました。今後増やしたい事業の一つが、福祉、医療、食、教育…様々な分野で、これまでもつながってきた分野や団体からさらに幅を広げていくため、情報交換や共有のための会や研修会を主催していくとのことです。

「もう一つしていきたいことが、平时的からの居場所づくりです。避難者支援をする中で、暮らしに溶け込めず孤立し、孤独を感じてしまう人も見てきました。年に一度でも会いにいくと『私たちは忘れられていなかったね』と言われる人もいます。これは災害ということに限らないと思います」

現在の事務所スペースを広くし、被災者だけでなく、事務所周辺の様々な人が集う空間を作る計画をたてています。

「そこでお茶を飲め、コワーキングで使ってもらってもいい。大きなことはできなくても、誰もがふらっと寄れて、一人でも二人でも誰かの居場所になればいいなあと。やっぱり何かあった時には一人ではどうしようもない。日常的に人のつながりを作っていく活動もしていきたいと思っています」



現在進行形の
高校生の動きを
紹介する

高校生ing

食を通じた 地元の 魅力発信

Tottori Gourmet



今回は高校生レストランの営業や各種コンクールへの出場を行いながら、地元企業と一緒に鳥取の食材を使った商品開発を行うなど、地域の魅力発信も行っている倉吉北高等学校の調理クラブを取材しました。



2年生

田中 創士
さん



1年生

石兼 健粋
さん



取材先

学校法人松柏学院
倉吉北高等学校
調理クラブ



活動をととしてご自身が成長したと 感じることはありますか？



石兼さん

以前、ある企画でオリジナルメニューを考える機会がありました。自分もメニューを考案したのですが、その時は採用されませんでした。悔しい思いをしたのですが、先日実施した高校生レストランでは再度メニューを提案する機会があり、今回は考案したメニューを採用してもらえました。包丁の扱いがまだ上手くないので、今後はその辺りを頑張っていきたいと思っています。



田中さん

コンクールに出場しているのですが、今年は負け続けています。悔しくて、次に向けてこの冬に何ができるかを考えています。自分はスイーツ系が苦手なので、スイーツが得意なメンバーに教えてもらって練習をしているところです。また、これまではあまり他の人の意見を取り入れるということが出来ていなかったように思います。今後は他の人の意見も取り入れながら大会などに挑んでいきたいと思っています。



お二人が料理に興味を持った きっかけは？



田中さん

小さい時に家族と大阪で食べた鉄板焼きのコース料理の印象が強く残っていて、それから料理に興味を持つようになりました。また家族も商売をしていて忙しいので、中学生の頃からお昼ご飯などをつくったりしていました。「美味しい」と言ってもらえるのが嬉しいです。



石兼さん

中学校2年生の時に、祖母に手伝ってもらいながら、イカの刺身をつくりました。家族が美味しいと食べてくれたのが嬉しくて、それがきっかけです。今も家族や知っている人からの「美味しい」の一言はもちろん嬉しいのですが、それ以外の知らない人からの「美味しい」が何故かより一層嬉しく感じるようになりました。そう言ってもらえると次からはもっと丁寧に美味しい料理を出せるようになりたいと思うようになりました。



地域の方と連携して実施している 企画などあれば教えてください



田中さん

山陰三ツ星マーケットなど地元を盛り上げるイベントにも出店させてもらっています。企画をしている大人の方々は地元がとても好きそうで、鳥取をアピールしようとしている姿が凄いなと感じています。「ご当地！絶品うまいもん甲子園」などに出場した際には、私たちも同じ想いで鳥取の食材を使ったメニューなどでアピールしています。まだまだ鳥取の食材で知られていないものもあるので、そういった食材を料理に使うことでもアピールしていければと思っています。



石兼さん

私もこうした大人の方の姿勢を見てとても頼もしく感じます。今後は観光客の方にもっと鳥取に来て欲しいと思っているので、自分達もアピールしていければと思っています。



調理クラブでは どのような活動をしていますか？



田中さん

調理クラブでは高校生レストランの営業やお弁当の販売、イベントの出店、各種大会への参加などを行っています。他には地元食材を活かして、企業や商工会議所の皆さんとコラボして新しい商品開発なども行っています。

また、今年は社会福祉協議会やインターアクトクラブ(生徒会の部活動)と一緒に防災教育に関する取り組みも行いました。主にサポート役として関わったのですが、火を使わずに調理をする方法などを一緒に学びました。帰りには調理クラブでつくったオムライス弁当を参加者の方にお土産として持って帰ってもらいました。



編集後記

今年1月、当センターが設立10周年を迎えた。これを機に、これまでの活動を振り返り、今後の活動を検討している。秋頃には、皆さんと交流を深める機会を計画したい。これまでのご支援に感謝し、これからも、センターの活動へのご理解と参画をお願いしたい。

(小林 綾子)

てとり「てとり」はとっとり県民活動活性化センターの愛称です。

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：毛利 葉

編集人：小林 綾子

取材・編集：藤田 和俊（合同会社僕ら）、寺坂 純子、椿 善裕、池淵 菜美、谷 祐基、世瀬 あけみ、上山 梓

写真：藤田 和俊（合同会社僕ら）

写真提供：鳥取市佐治人権福祉センター、社会福祉法人倉吉市社会福祉協議会、るりゆーる、NPO法人西部ろうあ仲間サロン会、認定NPO法人人と動物の共生センター鳥取支部、とっとり震災支援連絡協議会、学校法人松柏学院倉吉北高等学校調理クラブ

デザイン：山本印刷株式会社



「てとり」
バックナンバー
はこちらから。

2024年3月11日発行(第20号)

お問合せ／公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <http://tottori-katsu.net/>
〒682-0023 鳥取県倉吉市山根557-1 パープルタウン2階
TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470 E-mail info@tottori-katsu.net